

渋江孝夫

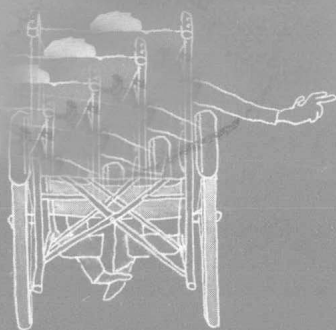
ケン 健一と



晩成書房

洪江孝夫

健一



晚成書房

渋谷孝夫 ■ しぶえ・たかお

1941年生まれ。東京教育大学教育学部卒業。
同大学附属桐が丘養護学校を振り出しに、目黒区立わかたけ学級、都立城南養護学校、都立町田養護学校と、障害児の教育に携わる。
現在、都立立川養護学校教諭。

■主な著作

『生きる力を育てる』(ぶどう社)〔第Ⅰ章3節〕,『障害児の体育』(大修館)〔Ⅱ-3-(4)〕,『障害児教育の展開』(福村出版)〔Ⅲ-1〕,『運動障害の教育と福祉』(図書文化)〔VI-3〕,『障害のある子に豊かな表現活動を』(晩成書房)〔Ⅱ〕ほかに、分担執筆。

■現住所

東京都府中市住吉町5-8-19

ケンと健一

一九八三年八月三十一日 第一刷発行
一九八三年十月十日 第二刷発行

定価 一三〇〇円

著者 渋谷孝夫

発行者 石原直也

発行所 晩成書房

● 101 東京都千代田区猿樂町一―四―四 STビル
● 電話 ○三―二九三―八三四八(代)
● 振替 東京七―七二九〇―

印刷所 松澤印刷株式会社

製本所 株式会社三森製本所

乱丁・落丁はお取り替えます

ISBN 4-938180-53-7 C 0093

ケンと健一 圖 もくじ

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
絵理子と美子	桜養護学校訪問	ふたつの願い	な・か・ま・い・る	盤上の戦い	燃える瞳	ひよこたん	早川先生	伸びた手	縁日の夜	車椅子の子
127		99	86	70	62	52	42	30	14	7



12 赤い血 137

13 か・え・れ 151

14 生きること死ぬこと 169

15 さむい部屋^{へや} 183

16 すてきな思いつき 195

17 中野先生の秘密^{ひみつ} 207

18 「ぼくのねがい」 223

19 光の中の子どもたち 232

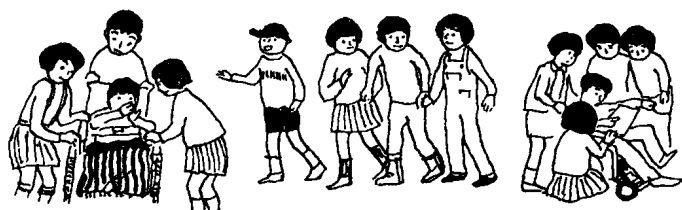
20 蝶^{ちよう}がとんだ日 251

あとがき 269

題字 ■ 渋谷佐和

装画・さし絵 ■ 渋谷孝夫

装幀 ■ 水野久



ケンと健一

1 くるまいす
車椅子の子

小川健一が初めてその子に会ったのは、五年生の夏休みも終わりに近い、ある夜のことだった。その夜、夕食をおえるのを待っていたかのように、同級生の林昇一が呼びにきて、路地の縁台で将棋をさしていた。もちろん、その横にはいつものように米三じいさんもすわっていて、うちわをせわしく動かしては足もとの蚊を追いながら、ふたりの勝負をじっと見ている。そして、一手うつごとに、横あいから

「フーン……。健坊、そりやまずいぜ」とか、「ホホン、昇一、味なまねをするじゃねえか」とか、寸評をくだすのだった。

米三じいさんは健一の家の一軒おいた先隣りにミツばあさんとふたりで暮らしている。根っからの将棋好きで、健一は二年生の頃から教えてもらっていた。もう七十歳に近いというのに、しゃきつとしていて、元気で働いている植木職人だ。



縁台将棋は米三じいさんの家の前——というのはそこに外燈があつたからだ、たとえば外燈がなかったとしても、裸電球かなにかひっぽってきて、子どもたちに将棋を教えてくれたにちがいない。それくらい子どもと将棋が好きだったのだ。

その夜、健一は飛車落ちでさしていた。飛車という大駒を初めから持たずに戦うのだから、健一にとっては大変なことだ。考えあぐねると健一は坊ちゃん刈りの頭をトントンとたたいた。度の強い眼鏡をかけた小柄な昇一は腕を組んで考えこむ。勝負は中盤、おたがいの駒が中央でにらめっこの状態であつた。

健一は指先に力をこめてパチンと桂馬を進めた。昇一がまた、まるでおとなみたいになう。うなって、眼鏡がずり落ちるのもかまわず、腕を組んで考えこんでしまったときだった、その子が横を通りすぎたのは。

その子は車椅子に乗っていた。女の人が押している。(あれ、車椅子だ)と、健一は通りすぎるのをなにげなく見やっていた。すると、それは四、五メートル行つた所で止まった。と、車椅子の横からにゅーっと細い手が横の方に伸びて出た。健一ははっとして、はじめてその子に気がついたのである。車椅子の横から伸びたその細い腕の先で、指がからみあつたように変な形で動いたのを、健一は見えていた。

その子が女の人に何か訴えている。女の人が——たぶん、母親なのだろう——何かぼそぼそと言

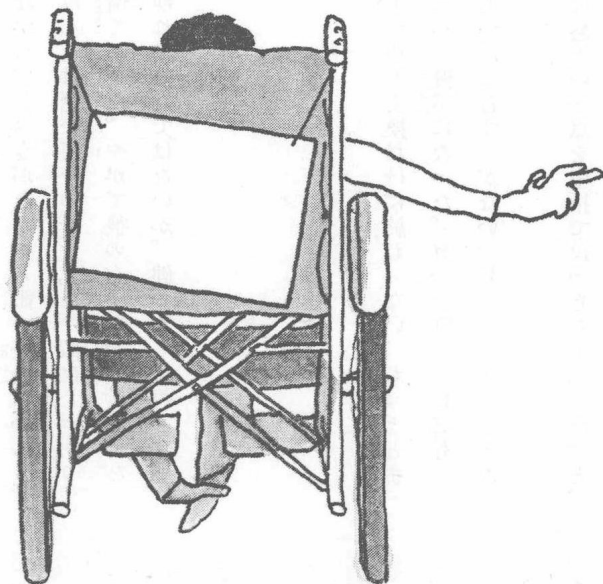
っている。健一の耳に、その最後の部分だけがとびこんできた。

——じゃあ、ほんのちょっとだけよ。

女の人は車椅子の向きをくると変えようと、縁台のそばに近づけてきた。健一はその子を真正面から見るかっこうになった。男の子だった。色の白い、小さな体。くちびるがもごもご動いて、舌がちらつと出、それがひっこんだとき、よだれがつーとあごにたれた。その子はあわててひざの上のタオルをつかむときこちなく口にくわえた。その動きがまるでロボットのように見えた。

米三じいさんと昇一はそのとき初めて顔をあげた。「あの、ちょっと見せてやって下さいませんか？」と、女の人が遠慮がちに言った。

「え？」とじいさんは驚いたように口をあけていたが、



「あ、どうぞ、どうぞ」と答えて、その妙な男の子の様子をしばらくながめていた。

昇一はとてもその子が気になるらしく、ちらっちらっと見やりながら、眼鏡をしきりに指で押し上げていたが考えあぐねて次の一手をさした。すぐさま健一が応じると、

「あ、そうか。うーん、まいったなあ」と、頭をかきながら、しょうがないやと銀の交換にいこうとした。その時、突然その子が足をばたばたさせた。みんなは驚いてその子を見た。眼はしっかりと盤上を見ている。必死に何かを訴えているような表情であった。やがて彼の右手がすうっと伸びたかと思うと、中指の先が、盤上の一点を指すようにゆれ動いたではないか。健一たちは思わず顔を見合わせた。

「ケンちゃん！ 静かに見てるって約束でしょう」

女の人があわててその子の手を抑えた。

（ケンちゃん?!……ぼくと同じ名前だ……）

健一はあらためてその子の顔を見た。昇一がさした手は銀の交換だけに終わらない、ちょっとまずい手だったのだ。たちまち健一の角が敵陣にはいりこんで優勢になった。昇一は守るのに必死で攻撃を忘れがちになった。健一の守りが固く、ちょっとつけこむすきがない。昇一はうーんとうなっていた。

すると、その子の手がまた、すうっと伸びて、今度は盤上の一点を中指ではっきりと示した。と、

そのとき、身をのり出した彼の口からタオルが昇一のひざに置いた手の甲にポトリと落ちた。昇一はびくっとして、あわててそれを払い落とした。

「きたねえなあ。よだれがくさいよ。あっち行けよ！」

「すみません、ごめんなさいね」

女の人はあわててタオルを拾った。顔が青ざめていた。

「さ、帰りましょう。ありがとうございます」

その子は口をへの字に曲げて、不満げな顔をしたがさからわなかった。

「奥さん、気にしないでおくんなさい。どうぞ、そのまま見せておいてあげなさいよ、見たがってるんだ」と米三じいさんが言った。

「ありがとうございます。でも、もうやすむ時間ですから」

女の人はそう言うのと、もう一度

「ありがとうございます。おやすみなさい」と頭を下げ、車椅子を押して去って行った。

三人はしばらくそのうしろ姿を見送っていた。

「昇一！ てめえ何てことを言いやがるんだ」

米三じいさんが怒ったように言った。

「だって、よだれがびしょつくつくついたんだ、気持ちわるいよ。それにくさいよ、ほら！」

昇一は左の手をつき出してみせた。

「しかしそれはな、つけようと思ってつけたわけじゃないだろ。あの子だって一生懸命氣をつけたじゃないか」

米三じいさんは静かにそう言って、それから、ポツリとつぶやくようにつけ加えた。

「あの子は強えぞ。なかなかいい筋をしている」

「強い？ あいつが？」と、昇一が言った。

「ああ、おまえらよりは上だな」

「ほんと？」と、健一。

「ま、一度さしてみな。さ、今夜はこれまでにしようぜ。健坊、駒と盤を片づけときな」

そう言い残すと、じいさんはうちわをばたきたやりながら、家の中へ入っていった。健一たちは駒を箱の中にしまいながら、

「あんな変な奴が本当に強いのかなあ」

「手がロボットみたいに、こんなふうに動いてさ、口のあたりもゆがんでいたよ」

「あんな赤ん坊みたいな奴に負けるわけないよな」と、昇一が同意を求めるように言った。

健一もそう思ったが、米三じいさんのつよいということばがひっかかって、「うん」と小さな声で答えた。

家に帰っても、健一はその夜のことを誰にも話す気になれなかった。それは健一自身、昇一と同じように、あの子のことを変な子だと思ったし、よだれをきたないと思ったからだ。家の人に話せば、そんなこと言っちゃいけないと言われるだろう。しかし、あのよだれでびしょびしょのタオルが自分の手に落ちていたらと思うと、ぞっとするのだ。そう思っちゃいけないと言われても、そう思うのが正直な気持ちだった。だから、家の人たちに何となく話したくなかったのだった。

とにかく、健一がその子に会ったのは、その夜が初めてのことであった。



2 縁日えんにちの夜

それから二、三日たって、近くのお不動様ふどうさまの境内けんだいに縁日えんにちが立った。

久しぶりに早く帰ったお父さんも加わり、お母さん、妹の二年生の幸子さちこと健一の一家四人で、夕食が終わると縁日へ出かけた。

みんな浴衣ゆかたがけ、夜風がこちよかった。うちわを手に手に持って、お不動様に出かけると境内いっぱいには裸電球はだかがこうこうと光って昼間のように明るかった。テントの色、売り物の色、人々の衣服の色、それらの光がごちゃごちゃと輝かがやいている。

おもちや屋、衣料品いりょうひん、わたあめ、七味とうがらしの店……次々と見ながら歩いていくうち、お父さんとお母さんは盆栽ぼんさいの所でひっかかって、あれやこれやとふたりで話しこんでしまった。健一と幸子は先へ行こうよとせかすのだが、ふたりはもうすこし、もうすこしとなかなか動こうとしない。そこで健一たちはおこずかいをねだって先に行くことにした。

